

近代国民国家への長い道程

(I) 近代化の始まり

タイと日本は、東アジアないし東南アジアにおいて、西欧列強による植民地化を免れたただ二つの国家であり、両国はほぼ同時に国家体制の自力の近代化に着手しました。当時のサヤーム王国がイギリスと最初の通商和親条約を結んだのは1855年のことでしたが、それは、徳川幕府が日米通商和親条約を締結したわずか1年後のことです。

こうした国際条約はいわゆる「不平等条約」であり、西洋諸国に対して領事裁判権（治外法権）の行使を認めると同時に、関税自主権を放棄することを内容としていました。サヤームにおいても日本においても、この不平等条約を改正して領事裁判権を廃止することが、喫緊の政治課題となりました。そしてそのためには、近代的な、西欧風の法律制度を整備することが、求められたのです。

(II) イギリス法制の導入

開国後、サヤーム王国はイギリスと緊密な通商関係を築きました。インドにおける植民地経営のために、イギリスは大量の米を必要としていたのです。サヤーム王国は、その米をイギリスに提供することを約束し、その見返りに自国の独立を維持しました。こうした事情もあって、サヤーム政府は必要な限りで、イギリス風の商事法や訴訟制度を導入しました。また、当時のサヤーム政府は、サヤームの伝統的な法制度は、ヨーロッパ大陸系の法典法システム（civil law）よりも、イギリス風の判例法体制（Common law）に近いという認識を持っていたようです。こうした理由から、イギリス法制の部分的導入が行われましたが、それは決して全面的、計画的な「コモンローの継受」ではありませんでした。

(III) チャクリ行政改革

日本の明治政府は、フランス人やドイツ人などの外国人法律顧問の助力を受けて、極めて短期間のうちに刑法、民法、商法など、主要な近代法典を整備しましたが、サヤームにおける近代法整備は非常に緩慢なものでした。と言うのも、それよりも優先される重要課題があったからです。

当時のサヤームは、ラタナコシン王朝の支配下にありましたが、その領土はいまだに封建領主の支配する領国や属国に分割されたままでした。ラタナコシン第五代国王ラーマ五世は、西洋列強がサヤームの分断に着手する前に国家権力を集中化しなければならないと考えました。そこで、支配階級である封建貴族たちに働きかけ、領地支配・領民支配を自主的に放棄するなら、中央政府の国家官僚としての地位を保障すると説得に当たったのです。そして徐々に行政組織を整備し、同時に中央政権を支える近代的国軍を組織したのです。

(IV) サックディナー制の廃止

この統治制度改革と同時に、身分制度が改革されました。当時の封建貴族たちは、領民を直接に支配する権限（プライ制度）を有していただけでなく、多くの債務奴隷を所有していて、奴隷市場が広く存在したのです。プライは、賦役労働と兵役という重い負担に喘いでいました。こうしたアユッタヤー以来の封建的身分制度をそのままにしては、タイ社会の近代化は不可能です。そこで国王は、伝統的な賦役・兵役の義務を順次、貨幣による近代的な税制に転換することにしました。

そして1874年、国王はついに奴隷制の廃止と人身売買の禁止に着手しましたが、封建貴族たちの抵抗と反逆を恐れたため、きわめて緩慢に進めざるを得ませんでした。1905年、身分制度改革と奴隷解放政策は実に30年以上の年月をかけてやっと完了するに至りました。こうして20世紀初頭、近代法制導入の前提がやっと整ったのです。

(V) 巧みな外交交渉

このようにしてサヤーム政府は、英仏両大国の軍隊が東西に控える中、内乱や分裂を避けつつ、微妙なバランスを保ちながら、辛抱強く国政改革を遂行したのです。この間、サヤーム政府と西欧列強との外交交渉を担ったのは、ベルギーより招聘された外国人顧問ローラン・ジャックマン男爵でした。男爵は当時のヨーロッパでも名を馳せた国際法学者で、ベルギーの司法大臣を勤めたこともある人物です。サヤーム王国の主権と独立を守り抜いたその功績を讃えて、ラーマ五世は男爵に「チャオプラヤーアパイラーチャー公爵」というサヤーム王国の貴族の称号を授与しています。

Gustave Rolin-Jaequemyns

🌐 9 languages ▼

Contents hide

(Top)

- [Childhood and Youth](#)
- [International Law](#)
- [Political climate of Belgium \(1848-1884\)](#)
- [School Struggle](#)
- [Congo](#)
- ▼ [Siam](#)
 - [Cairo](#)
 - [Situation in Siam](#)
 - [Reforms](#)
- [Chao Phya Abhai Raja Rolin-Jaequemyns, his legacy](#)
- [Published work](#)
- [See also](#)
- [Notes](#)
- [References](#)
- [Sources](#)
- [Further reading](#)
- [External links](#)

Article Talk

Read Edit View history Tools ▼

From Wikipedia, the free encyclopedia

Gustave^[4] **Henri Ange Hippolyte Rolin-Jaequemyns** (31 January 1835 – 9 January 1902) was a Belgian lawyer, diplomat and Minister of the Interior (1878–1884) as a member of the **Unitarian Liberal Party**. Together with the Swiss jurist **Gustave Moynier**, he founded the **Institut de Droit International** and became its first *Honorary President*.

Even though his personal convictions were deeply religious, he is considered **anticlerical** because of his staunch defence of the **separation of church and state**. Serving as an advisor to **King Rama V** of **Thailand**, he played a crucial role in the reformation of that country to modern western standards and was awarded the title *Chow Phya Abhai Raja*, the highest distinction ever granted to a foreigner.

Rolin-Jaequemyns' reputation as an expert on international law was widely recognized. He played an important role in codifying the laws of war.^[1] He became a member of several national academies, for example 1870 in **Montreal**, 1872 in **Madrid**, in 1874 in **Belgium** and 1881 in **Constantinople**. In 1877, the **University of Edinburgh** granted him the title of *Doctor Honoris Causa*, and later he received the same distinction from the universities of **Cambridge**, **Oxford** and **Brussels**. In 1889 **King Leopold II** of Belgium appointed him member of the High Council for the independent state of the **Congo Free State**.

Childhood and Youth [edit]

Gustave Rolin-Jaequemyns was the eldest of 15^[5] children in the marriage between Hippolyte Rolin and Angélique Hellebaut. His father had graduated with distinction from the **University of Leuven** (French: *Louvain*), after which he was sworn in as solicitor and travelled to **Berlin** where he followed classes by **von Savigny** and **Hegel**. In 1830, at the start of the **Belgian Revolution**, he travelled to **Courtrai** and was elected into the *National Assembly*. Later (1848), he was elected into the **Belgian Chamber of People's Representatives** and held the office of *Minister of Public Works*.

Rolin excelled in the Gymnasium of Ghent and his musical skills quickly became apparent. At age 16 he travelled to the **United Kingdom** and thence to **Paris**, where he received a first prize at the **Lycée Charlemagne**. He then returned home and studied law at the **University of Ghent**. After graduating, he followed his father's example and went to Berlin for further studies. In 1860, when he was 25 years old, he was offered the chair of modern **political history**, but declined to help his father in his law firm.

Gustave Rolin-Jaequemyns



Rolin-Jaequemyns in a traditional Thai garment.

Born	31 January 1835 Ghent, Belgium
Died	9 January 1902 (aged 66) Brussels, Belgium
Nationality	Belgian
Other names	<i>Chao Phya Abhai Raja</i>
Occupation(s)	Lawyer, international law expert, Minister of the Interior, Advisor to Rama V
Known for	Founder of the <i>Institut de Droit International</i>

(VI) 立法政策の転換

サヤーム王国に初めて司法省が設立されたのも 1891 年のことでした。当時ラーマ五世は、近代法制の整備計画を再検討し、イギリス風の制度ではなく、ヨーロッパ大陸系の法典法システムの導入に方針を転換しました。この新たな計画を実際に担ったのは、初代司法大臣コロムルワンラーチャブリーディレークリット親王（通称「ラピ親王」）でした。

ラピ親王は 1911 年、司法省付属の法律学校（ロースクール）を設立し、自らも教鞭に立って、近代法制を理解するタイ人法律家の養成に尽力しました。現在でもラピ親王は「タイの近代法制の父」として尊敬されています。

Raphi Phatthanasak

🌐 3 languages ▼

Contents hide

- (Top)
- [Ancestry](#)
- [References](#)

Article Talk

Read Edit View history Tools ▼

From Wikipedia, the free encyclopedia

Prince Raphi Phatthanasak, Prince of Ratchaburi (Thai: รพีพัฒนศักดิ์; RTGS: Raphi Phatthanasak), (21 October 1874 – 7 August 1920) was a son of king [Chulalongkorn](#) and Chao Chom manda Talab. He had one full sister, Princess [Ajrabarni Rajkanya](#).^[1]

A key figure in Thai legal reform, he graduated from [Faculty of Law, University of Oxford](#). In 1892, the [Ministry of Justice](#) was established and Prince Raphi was appointed as Head Minister to unify the judiciary.^[2] In 1897, he set up the first law school in Thailand. He also reorganized the Thai court system under the 1908 Law on Organization.^{[3]:66} During his tenure as the Minister of Justice, his attempts to increase the independence of the Thai judiciary from the executive led to tensions with the king's absolutist outlook.^[4] This would eventually culminate in his resignation in 1910, precipitated by a legal dispute with Prince [Narathip Praphanphong](#) over Narathip's play *Phraya Raka*.^[5] Following their mentor, 28 senior judges also resigned from the judiciary in a show of loyalty, though all but one were summoned by the king to resume their position.^{[4][3]:22} Prince Raphi would later return to the bureaucracy in the reign of King [Vajiravudh](#), serving as the Minister of Agriculture.^[5]


Prince Raphi died in Paris on 7 August 1920 at 21:00. He died of [prostate cancer](#) and kidney complications at the age of 45 years, 9 months, 17 days. [King Rama VI](#) asked the Siamese ambassador to France to organize a royal cremation ceremony in Paris, in accordance with Prince Raphi's wishes. After that, Prince Kaiseang-raphi Rabbibhat came to pick up and summon the Royal Regiment of Prince Raphi Phatthanasak to Thailand on 1 December 1920.^{[6][7]}

Ancestry [[edit](#)]

Ancestors of Raphi Phatthanasak

			Paternal Great-grandfather: Buddha Loetla Nabhalai , King Rama II of Siam
		Paternal Grandfather: Mongkut, King Rama IV of Siam	Paternal Great-grandmother: Queen Sri Suriyendra
	Father:		

Raphi Phatthanasak
Prince of Ratchaburi



Born 21 October 1874
[Grand Palace, Bangkok, Siam](#)

Died 7 August 1920 (aged 45)
[Paris, France](#)

Spouse Princess Orabhatra Prabai Mom On Rabibadhana Na Ayudhya
Mom Duaeng Rabibadhana
Mom Rajawongse Sa-ang Pramoj

Issue 13 sons and daughters

Names
His Royal Highness
Prince Rabibadhanasakdi

House [Rabbibhat family](#) ([Chakri Dynasty](#))

Father [Chulalongkorn](#) (Rama V)

Mother [Chao Chom Manda Talab](#)

(VII) 政尾藤吉

サヤーム政府が実際に着手した最初の近代法典は刑法でしたが、その成立には一人の日本人が貢献しています。この人物が政尾藤吉博士です。博士は、日本とサヤーム王国とが最初の通商和親条約を締結した際に日本国公使の助手として来泰しましたが、ローラン・ジャックマン男爵にその能力を認められて、1898年以來、男爵の補佐役としてサヤーム政府のために働くことになったのです。そして博士の最初の任務が、刑法草案を起草することでした。政尾博士の草案は1900年には完成して、直ちにサヤーム政府に提出されましたが、当時、フランスとの関係が悪化していた関係で、政府は外交交渉に注力し、博士の刑法草案はそのまま放置されてしまいました。

政尾藤吉

🗺️ 1の言語版

目次 非表示

ページ ノート

閲覧 編集 履歴表示 ツール

ページ先頭

経歴

家族

栄典

脚注

参考文献

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

政尾 藤吉（まさお とうきち、明治3年11月17日^[1](1871年1月7日) – 大正10年(1921年)8月11日^[2])は、日本の衆議院議員（立憲政友会）、駐シャム（タイ）公使。法学博士。

経歴 [編集]

伊予国喜多郡大洲町（現在の愛媛県大洲市）出身。大洲藩御用商人政尾勝太郎の長男^[3]。1888年に17歳で家出同然で故郷を離れ、大阪川口のミッション・スクールを経て、同年秋、慶應義塾に入学^[4]。同人社を経て、1889年に東京専門学校（現在の早稲田大学）英語普通科を卒業した^[3]。1890年、関西学院の神学部に入學し、宣教師サミュエル・ウェンライトの家に寄宿し、バルモア学院で英語教師も務めた^[4]。ウェンライトにると、藤吉は「まれにみる秀才」だったという^[4]。

翌年にアメリカ合衆国への留学に出発した^[3]。最初、テネシー州ヴァンダービルト大学神学部に入學したが、1893年に方向転換し、ウェストバージニア大学ロースクールに入學して1895年に卒業した^[3]。1896年、イェール大学を卒業し、法学修士号を得、翌年には同大学から民法法博士号を得た^[1]。

帰国後、*ジャパン・タイムズ*の記者となったが、外務省の委嘱でシャムに派遣された。1898年、総務顧問補佐となり、1902年に法律顧問となった^[1]。1903年、主席法律顧問に就任し、1913年まで務めた。法典編纂の功績で侯爵に叙任され、王族待遇を受けた^[5]。

シャムから帰国後は、1915年の第12回衆議院議員総選挙に出馬し、当選。1917年の第13回衆議院議員総選挙でも再選された。

1920年12月、駐シャム公使に任命されたが、翌年8月、在任中に死去した^[6]。

家族 [編集]

- 父・政尾勝太郎 - 大洲藩御用商「政屋」主人
- 妻・光 - 九鬼隆一の養女

栄典 [編集]

外国勲章佩用允許

- 1905年（明治38年）6月27日 - シャム王国白象第三等勲章^[7]



(VIII) 1908 年刑法典

1904 年にフランスとの関係が改善すると、フランス政府から一人の法律顧問が送り込まれてきました。ジョルジュ・パドゥー氏です。この間、ローラン・ジャックマン男爵は既に故国に帰還していて、政尾博士がその後任として司法省顧問の地位にありましたが、パドゥー氏の招聘後は、パドゥー氏が立法顧問となり、政尾博士は主に裁判官としての任務に異動します。

そしてサヤーム政府はまず、政尾博士の刑法草案の再検討をパドゥー氏に依託しました。このようにして、パドゥー氏によって起草された新草案が 1908 年に公布されることになったのです。この刑法典（กฎหมายลักษณะอาญา ร.ศ. ๑๒๗）こそ、タイの近代法典の最初のものでした。

(IX) 民商法典編纂の開始とその中断

刑法典の成功に勢いを得て、サヤーム政府はさらに民商法典の編纂事業に着手することになりますが、パドゥー氏の要請により、フランスから追加の法律顧問団が派遣されます。こうして、民商法典編纂の主導権はフランス人顧問団の手に委ねられたのですが、ラーマ五世やラピ親王から篤い信頼を得ていた政尾博士も積極的に関与していきました。ところが、その審理過程でフランス人顧問団と政尾博士とは、次第に対立を深めていきます。フランス人顧問団が執拗に「伝統法重視」を主張したからです。1912年、両者の関係がついに破綻するに至ります。フランス人顧問団が一夫多妻制の合法化を提案した時のことでした。政尾博士は断固としてこの提案を拒否します。審議会は膠着状態に陥り、とうとう国王ラーマ六世は、家族法および相続法に関する審議の中止を命じます。ここに至って政尾博士はサヤームでの全ての職責を辞する決意を硬め、1913年日本に帰国しました。

(X) 政尾博士の思惑

政尾博士のこの行動には、フランス人顧問団との対立の他に、ある思惑があったものと思われます。当時、西欧列強は領事裁判権の不合理性を認識し始め、近代的な法制度が成立した分野から漸次それを廃止していくことに合意していました。ところが、こともあろうに日本政府だけがこの要求に応じようとはしていなかったのです。そこで政尾博士は、サヤーム側からの工作を諦め、日本政府の側に入り込んで、その内部から領事裁判権廃止を働きかけると同時に、フランス人顧問団の進める民商法典編纂事業についても、今度は日本政府の側から干渉しようと思慮したものである。

この目論見が日の目を見、政尾博士は1921年、晴れて在泰日本国大使として、再びバンコクの地に戻りましたが、サヤーム政府との交渉開始を間近に控えたこの年の8月11日、脳溢血の発作に襲われ、亡くなります。

民商法典編纂事業のその後 …

このような事情で、政尾博士の帰国後は民商法典編纂事業はフランス人顧問団の独壇場となり、その経緯に関する情報も、日本には伝わらなくなります。したがって1913年以降の展開については、タイ語文献を参照しなければなりません。

タイ民商法典の構成

	通則	1 条	～	3 条
第一編	総則	4 条	～	193 条の 35
第二編	債権総則	194 条	～	452 条
第三編	契約各則	453 条	～	1297 条
第四編	物権	1298 条	～	1434 条
第五編	家族	1435 条	～	1598 条の 41
第六編	相続	1599 条	～	1755 条

 [Official English Translation by Office of the Council of State](#)

タイ民商法典の変遷

	1919	1923	1925	1929	1931	1935	1976	1990	1992
I	最終草案	公布 (旧法) Nov. 2466	公布 (新法) Nov. 2468						改正 Mar. 2535
II		公布 (旧法) Nov. 2466	公布 (新法) Nov. 2468						
III			公布 (旧法) Jan. 2467	公布 (新法) Jan. 2471					
IV						公布 Mar. 2473			
V・VI		—					公布 (旧法) Oct. 2478	公布 (新法) Oct. 2519	改正 Sep. 2533

ประมวลกฎหมายแพ่งและพาณิชย์ タイ民商法典 (老くじ)

通則

第一編 総則

第一章 総則

第二章 人

第一節 自然人

第一款 権利能力(私権)

第二款 行為能力

第三款 住所

第四款 失踪

第二節 法人

第一款 総則

第二款 社団法人

第三款 財団法人

第三章 物

第四章 法律行為

第一節 総則

第二節 意思表示

第三節 無効および取り消し

第四節 条件および期限

第五章 期間

第六章 時効

第一節 総則

第二節 時効の期間

第二編 債権債務関係

第一章 総則

第一節 債権の目的

第二節 債権の効力

第三節 多数当事者

第四節 債権の譲渡

第五節 債権の消滅

第二章 契約

第一節 契約の成立

第二節 契約の効力

第三節 手付金および違約金

第四節 契約の解除

第三章 事務管理

第四章 不当利得

第五章 不法行為

第一節 不法行為の責任

第二節 不法行為による損害の賠償

第三節 正当防衛

ข้อความเบื้องต้น

บรรพ ๑ หลักทั่วไป

ลักษณะ ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

ลักษณะ ๒ บุคคล

หมวด ๑ บุคคลธรรมดา

ส่วน ๑ สภาพบุคคล

ส่วน ๒ ความสามารถ

ส่วน ๓ ภูมิลำเนา

ส่วน ๔ สาบสูญ

หมวด ๒ นิติบุคคล

ส่วน ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

ส่วน ๒ สมาคม

ส่วน ๓ มูลนิธิ

ลักษณะ ๓ ทรัพย์สิน

ลักษณะ ๔ นิติกรรม

หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

หมวด ๒ การแสดงเจตนา

หมวด ๓ โฆษะกรรมและโมฆะกรรม

หมวด ๔ เงื่อนไขและเงื่อนไขเวลา

ลักษณะ ๕ ระยะเวลา

ลักษณะ ๖ อายุความ

หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

หมวด ๒ กำหนดอายุความ

บรรพ ๒ หนี้

ลักษณะ ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

หมวด ๑ วัตถุประสงค์หนี้

หมวด ๒ ผลแห่งหนี้

หมวด ๓ ลูกหนี้และเจ้าหนี้หลายคน

หมวด ๔ โอนสิทธิเรียกร้อง

หมวด ๕ ความระงับหนี้

ลักษณะ ๒ สัญญา

หมวด ๑ ก่อให้เกิดสัญญา

หมวด ๒ ผลแห่งสัญญา

หมวด ๓ มัดจำและกำหนดเบี้ยปรับ

หมวด ๔ เลิกสัญญา

ลักษณะ ๓ จัดการงานนอกสั่ง

ลักษณะ ๔ ลากมิควรรได้

ลักษณะ ๕ ละเมิด

หมวด ๑ ความรับผิดชอบเพื่อละเมิด

หมวด ๒ ค่าสินไหมทดแทนเพื่อละเมิด

หมวด ๓ นิรโทษกรรม

第三編 各種契約

第一章 売買

- 第一節 売買契約の性質と要件
- 第二節 売主の義務と責任
- 第三節 買主の義務
- 第四節 各種特殊売買

第二章 交換

第三章 贈与

第四章 賃貸借

- 第一節 総則
- 第二節 賃貸人の義務と責任
- 第三節 賃借人の義務
- 第四節 賃貸借契約の終了

第五章 割賦販売

第六章 雇用

第七章 請負

第八章 運送営業

- 第一節 物品運送
- 第二節 旅客運送

第九章 使用および消費貸借

- 第一節 使用貸借
- 第二節 消費貸借

第十章 寄託

- 第一節 総則
- 第二節 金銭の寄託に関する特則
- 第三節 宿主の責任に関する特則

第十一章 保証

- 第一節 総則
- 第二節 履行前の効果
- 第三節 履行後の効果
- 第四節 保証の終了

第十二章 抵当

- 第一節 総則
- 第二節 抵当権の及ぶ範囲
- 第三節 抵当設定者と抵当権者各々の権利と義務
- 第四節 抵当権の実行
- 第五節 抵当権目的物の譲受人の権利と義務
- 第六節 抵当契約の終了

第十三章 質

- 第一節 総則
- 第二節 質権設定者と質権者各々の権利と義務
- 第三節 質権の実行
- 第四節 質契約の終了

第十四章 倉庫営業

- 第一節 総則
- 第二節 預証券および質入証券

บรรพ ๓ เอกเทศสัญญา

ลักษณะ ๑ ซื้อขาย

- หมวด ๑ สภาพและหลักสำคัญของสัญญาซื้อขาย
- หมวด ๒ หน้าที่และความรับผิดชอบของผู้ขาย
- หมวด ๓ หน้าที่ของผู้ซื้อ
- หมวด ๔ การซื้อขายเฉพาะบางอย่าง

ลักษณะ ๒ แลกเปลี่ยน

ลักษณะ ๓ ให้

ลักษณะ ๔ เช่าทรัพย์

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ หน้าที่และความรับผิดชอบของผู้ให้เช่า
- หมวด ๓ หน้าที่ของผู้เช่า
- หมวด ๔ ความระงับแห่งสัญญาเช่า

ลักษณะ ๕ เช่าซื้อ

ลักษณะ ๖ จ้างแรงงาน

ลักษณะ ๗ จ้างทำของ

ลักษณะ ๘ รับขน

- หมวด ๑ รับขนของ
- หมวด ๒ รับขนคนโดยสาร

ลักษณะ ๙ ยืม

- หมวด ๑ ยืมใช้คงรูป
- หมวด ๒ ยืมใช้สิ้นเปลือง

ลักษณะ ๑๐ ผากทรัพย์

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ วิธีเฉพาะการฝากเงิน
- หมวด ๓ วิธีเฉพาะสำหรับนักท่องเที่ยว

ลักษณะ ๑๑ ค้ำประกัน

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ ผลก่อนชำระหนี้
- หมวด ๓ ผลภายหลังชำระหนี้
- หมวด ๔ ความระงับสิ้นไปแห่งการค้ำประกัน

ลักษณะ ๑๒ จำนอง

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ สิทธิจำนองครอบเพียงใด
- หมวด ๓ สิทธิและหน้าที่ของผู้รับจำนองและผู้จำนอง
- หมวด ๔ การบังคับจำนอง
- หมวด ๕ สิทธิและหน้าที่ของผู้รับโอนทรัพย์สินซึ่งจำนอง
- หมวด ๖ ความระงับสิ้นไปสัญญาจำนอง

ลักษณะ ๑๓ จำนำ

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ สิทธิและหน้าที่ของผู้รับจำนำและผู้จำนำ
- หมวด ๓ การบังคับจำนำ
- หมวด ๔ ความระงับสิ้นไปสัญญาจำนำ

ลักษณะ ๑๔ เก็บของในคลังสินค้า

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ ใบรับของคลังสินค้าและประหวอนสินค้า

第十五章	委任
第一節	総則
第二節	委任者に対する受人者の義務と責任
第三節	受人者に対する委任者の義務と責任
第四節	第三者に対する委任者と受人者の責任
第五節	委任の終了
第六節	問屋営業
第十六章	仲立営業
第十七章	和解
第十八章	賭博
第十九章	交互計算
第二十章	保険
第一節	総則
第二節	損害保険
第三節	生命保険
第二十一章	手形(有価証券)
第一節	総則
第二節	為替手形
第三節	約束手形
第四節	小切手
第五節	時効
第六節	手形の偽造、盗難および紛失
第二十二章	パートナーシップおよび会社
第一節	総則
第二節	普通パートナーシップ(合名会社)
第三節	有限パートナーシップ(合資会社)
第四節	非公開株式会社(有限会社)
第五節	登記済み普通パートナーシップ、有限パートナーシップおよび有限会社の清算

ลักษณะ ๑๕	ตัวแทน
หมวด ๑	บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
หมวด ๒	หน้าที่และความรับผิดชอบของตัวแทนต่อตัวการ
หมวด ๓	หน้าที่และความรับผิดชอบของตัวการต่อตัวแทน
หมวด ๔	ความรับผิดชอบของตัวการและตัวแทนต่อบุคคลภายนอก
หมวด ๕	ความระงับสิ้นไปสัญญาตัวแทน
หมวด ๖	ตัวแทนค่าต่าง
ลักษณะ ๑๖	นายหน้า
ลักษณะ ๑๗	ประนีประนอมยอมความ
ลักษณะ ๑๘	การพนันและขิ้นต่อ
ลักษณะ ๑๙	บัญชีเดินสะพัด
ลักษณะ ๒๐	ประกันภัย
หมวด ๑	บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
หมวด ๒	ประกันวินาศภัย
หมวด ๓	ประกันชีวิต
ลักษณะ ๒๑	ตัวเงิน
หมวด ๑	บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
หมวด ๒	ตัวแลกเงิน
หมวด ๓	ตัวสัญญาใช้เงิน
หมวด ๔	เช็ค
หมวด ๕	อายุความ
หมวด ๖	ตัวเงินปลอม ตัวเงินอุกฉลัก และตัวเงินหาย
ลักษณะ ๒๒	หุ้นส่วนและบริษัท
หมวด ๑	บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
หมวด ๒	ห้างหุ้นส่วนสามัญ
หมวด ๓	ห้างหุ้นส่วนจำกัด
หมวด ๔	บริษัทจำกัด
หมวด ๕	การชำระห้างหุ้นส่วนจดทะเบียน ห้างหุ้นส่วนจำกัด และบริษัทจำกัด

* なお、上記3種類の商事会社の他に、1992年の特別法「公開株式会社法」により「公開株式会社」が認められています (พระราชบัญญัติ บริษัทมหาชนจำกัด พ.ศ.๒๕๓๕)。

第四編 物権

第一章 総則

第二章 所有権

第一節	所有権の取得
第二節	所有権の範囲とその行使
第三節	共有

第三章 占有権

第四章 地役権

第五章 居住権

第六章 地上権

第七章 用益権

第八章 物的負担

บรรพ ๔ ทรัพย์สิน

ลักษณะ ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

ลักษณะ ๒ กรรมสิทธิ์

หมวด ๑	การได้มาซึ่งกรรมสิทธิ์
หมวด ๒	แดนแห่งกรรมสิทธิ์ และการใช้กรรมสิทธิ์
หมวด ๓	กรรมสิทธิ์รวม

ลักษณะ ๓ ครอบครอง

ลักษณะ ๔ การจำยอม

ลักษณะ ๕ อาศัย

ลักษณะ ๖ สิทธิเหนือพื้นดิน

ลักษณะ ๗ สิทธิเก็บกิน

ลักษณะ ๘ การติดพันในอสังหาริมทรัพย์

第五編 家族

第一章 婚姻

- 第一節 婚約
- 第二節 婚姻の要件
- 第三節 夫婦関係
- 第四節 夫婦財産制
- 第五節 婚姻の無効
- 第六節 婚姻の終了

第二章 親子

- 第一節 父親と母親
- 第二節 親子それぞれの権利と義務
- 第三節 後見
- 第四節 養子

第三章 扶養

第六編 相続

第一章 総則

- 第一節 遺産の相続
- 第二節 相続人
- 第三節 廃嫡
- 第四節 相続の放棄その他

第二章 法定相続権

- 第一節 総則
- 第二節 法定相続人の順位に従った遺産の分割
- 第三節 同順位の法定相続人間での相続分の分割
 - 第一款 親族
 - 第二款 配偶者
- 第四節 代襲相続

第三章 遺言

- 第一節 総則
- 第二節 遺言の方式
- 第三節 遺言の効力と解釈
- 第四節 遺言による遺産監督人の選任
- 第五節 遺言の全部または一部の破棄および失効
- 第六節 遺言の全部または一部の無効

第四章 遺産の管理と分配

- 第一節 遺産管理人
- 第二節 資産の総括、債務の弁済および財産の分離
- 第三節 遺産の分配

第五章 相続人の不存在

第六章 時効

บรรพ ๕ ครอบครัว

ลักษณะ ๑ การสมรส

- หมวด ๑ การหมั้น
- หมวด ๒ เงื่อนไขแห่งการสมรส
- หมวด ๓ ความสัมพันธ์ระหว่างสามีภริยา
- หมวด ๔ ทรัพย์สินระหว่างสามีภริยา
- หมวด ๕ ความเป็นโมฆะของการสมรส
- หมวด ๖ การสิ้นสุดแห่งการสมรส

ลักษณะ ๒ บิดามารดากับบุตร

- หมวด ๑ บิดามารดา
- หมวด ๒ สิทธิและหน้าที่ของบิดามารดาและบุตร
- หมวด ๓ ความปกครอง
- หมวด ๔ บุตรบุญธรรม

ลักษณะ ๓ ค่าอุปการะเลี้ยงดู

บรรพ ๖ มรดก

ลักษณะ ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป

- หมวด ๑ การตกทอดแห่งทรัพย์สินมรดก
- หมวด ๒ การเป็นทายาท
- หมวด ๓ การตัดมิให้รับมรดก
- หมวด ๔ การสละมรดกและอื่น ๆ

ลักษณะ ๒ สิทธิโดยธรรมในการรับมรดก

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ การแบ่งทรัพย์สินมรดกระหว่างทายาทโดยธรรมในลำดับและชั้นต่าง ๆ
- หมวด ๓ การแบ่งส่วนมรดกของทายาทโดยธรรมในลำดับและชั้นต่าง ๆ
 - ส่วน ๑ ญาติ
 - ส่วน ๒ คู่สมรส
- หมวด ๔ การรับมรดกแทนที่กัน

ลักษณะ ๓ พันัยกรรม

- หมวด ๑ บทเบ็ดเสร็จทั่วไป
- หมวด ๒ แบบพันัยกรรม
- หมวด ๓ ผลและการตีความแห่งพันัยกรรม
- หมวด ๔ พันัยกรรมที่ตั้งผู้ปกครองทรัพย์สิน
- หมวด ๕ การเพิกถอนและการตกไปแห่งพันัยกรรมหรือข้อกำหนดพันัยกรรม
- หมวด ๖ ความเสียเปล่าแห่งพันัยกรรมหรือกำหนดพันัยกรรม

ลักษณะ ๔ วิธีจัดการและปิ่นทรัพย์สินมรดก

- หมวด ๑ ผู้จัดการมรดก
- หมวด ๒ การรวบรวมเจ้าทรัพย์มรดกเป็นตัวแทน และการชำระหนี้กับแบ่งปิ่นทรัพย์สินมรดก
- หมวด ๓ การแบ่งมรดก

ลักษณะ ๕ มรดกที่ไม่มีผู้รับ

ลักษณะ ๖ อายุความ

明治23年日本民法（旧民法）財産編

Book on Properties

財産編

General Provisions

総則 財産及び物の区別

Part One : Real Rights

第一部 物権

Chapter 1 Ownership

第一章 所有権

Chapter 2 Usufruct, Use (commonage), and Habitation

第二章 用益権、使用権及び住居権

Section 1 Usufruct

第一節 用益権

Section 2 Use (commonage) and habitation

第二節 使用権及び住居権

Chapter 3 Lease, Emphyteusis, and Superficies

第三章 賃借権、永借権及び地上権

Section 1 Lease

第一節 賃借権

Section 2 Emphyteusis and superficies

第二節 永借権及び地上権

Chapter 4 Possession

第四章 占有

Section 1 Various kinds of possession and objects of possession

第一節 占有の種類及び占有することを得べき物

Section 2 Acquisition of possession

第二節 占有の取得

Section 3 Effects of possession

第三節 占有の効力

Section 4 Loss of possession

第四節 占有の喪失

Chapter 5 Servitudes

第五章 地役

General provisions

総則

Section 1 Statutory servitudes

第一節 法律を以て設定したる地役

Section 2 Servitudes by agreement

第二節 人為を以て設定したる地役

Part Two : Obligations

第二部 人権及び義務

General Provisions

総則

Chapter 1 Causes of Obligations

第一章 義務の原因

General Provisions

総則

Section 1 Agreements

第一節 合意

Section 2 Unjust Enrichment

第二節 不当の利得

Section 3 Unlawful damages i.e. Torts and quasi-torts

第三節 不正の損害

Section 4 Statutory provisions

第四節 法律の規定

Chapter 2 Effects of Obligations

第二章 義務の効力

General Provisions

総則

Section 1 Action for enforcement

第一節 直接履行の訴権

Section 2 Action for compensation

第二節 損害賠償の訴権

Section 3 Securities

第三節 担保

Section 4 Various kinds of obligations

第四節 義務の種類の様

Chapter 3 Extinction of Obligations

第三章 義務の消滅

Section 1 Performance (Discharge)

第一節 弁済

Section 2 Novation

第二節 更改

Section 3 Release

第三節 合意上の免除

Section 4 Set-off

第四節 相殺

Section 5 Confusion

第五節 混同

Section 6 Impossibility of performance

第六節 履行の不能

Section 7 Avoidance of obligations

第七節 鎖除

Section 8 Avoidance of claims

第八節 廃罷

Section 9 Rescission

第九節 解除

Chapter 4 Natural Obligations

第四章 自然義